調査結果を教師はこう見た

●和歌山県立伊都高校　進路指導部長　**飯島輝久先生**

教員の「負担感」をいかに払拭し「進路観」をいかに共有するか

11pに並ぶさまざまな項目には、今の高校現場の課題が非常によく表れていると私は感じました。例えば「生徒の問題」である「進路選択・決定能力の不足」や「学習意欲の低下」、「学力低下」は、どれがそもそもの問題なのかわからないくらい密接に絡み合っていて、解決がとても難しい問題だと思います。

私自身、「生徒にいかに安易な進路選択をさせないか」を常に念頭に置き、生徒や先生方に接しているつもりです。大学受験では、高い目標に向かって粘り強く頑張る生徒。生徒に伴走して最後まで面倒を見る先生。そういう人たちの存在を、私は声を大にして校内で宣伝しています。そんなささやかな運動で本校も少しずつ変わってきた手応えはありますが、まだまだ力が及びません。本当に大変な問題だなと実感しています。

キャリア教育については、先生方が感じる「負担感」はかなり大きいようですが（26、27p）、本校も例外ではありません。企業人など外部の人たちとの交流は生徒のモチベーションを高めるのにとても有効だと思いますが、先生方の負担を考えると、外部と連携する取り組みになかなか踏み出せません。本校がこれから乗り越えるべき課題のひとつと自覚しています。しかし、それ以上に切実な課題は「進路観の共有」だと思います。いわゆる先生方の「目線合わせ」が何より重要で、それをいかに進めるか、私は日々そのことを考えているといっても過言ではありません。それができなければ進路指導の何ごとも進んでいかないし、それができたらキャリア教育も一気に進むでしょう。また、キャリア教育は生徒を変えるきっかけになると同時に、学校を変える起爆剤にもなると私は確信しています。そんな状況を目指して、これからも努力していきたいと思っています。

●岡山県立勝山高校　教頭　**三浦隆志先生**

キャリア教育は高校現場の閉塞感をブレークスルーできる

今の時代に合った進路指導の「型」が見えてこない…。進路指導に困難を感じる先生が非常に多いというデータの背景にあるのは、そうした事情ではないでしょうか。PCのない時代に「名人芸」のような面談などで進路指導をしてきた先輩たちが退職し、そのノウハウが継承されていない高校もあるでしょう。現代のデータを重視した受験指導において、かつてのノウハウでは太刀打ちできないという現実もあるでしょう。とりわけ進路を担当する若い先生方に対しては、管理職やベテラン教師らが意識してフォローをしていく必要があると思います。

多くの先生方が感じる「負担感」や「疲弊感」といったものも、進路指導にはマイナスに働いているかもしれません。生徒が減り、すべての高校が存在価値を問われるなか、目に見えない厳しさが高校現場を覆っているように感じます。そんな時だからこそ教師全員で前向きに議論し、知恵を出し合い、この難局をブレークスルーしなければなりません。「キャリア教育」は、その際の有効なツールになり得ると私は考えます。

キャリア教育とは全校を挙げた、教科を超えた取り組みです。いかに限られた時間をやりくりし、どのように工夫して生徒を育てていくのかを教師が語り合うことは、キャリア教育を行う上で不可欠であると同時に、学校の一体感を高め、方向性を確かめる得難い機会になるはずです。

キャリア教育の実践においても、いかに「型」を作るかが私は重要だと思います。参考にできそうな他校の事例に学び、実際に取り組み、徐々に自校流にアレンジしていく。「変化させながら継続していく」ことが教師のスキルを高め、生徒への教育効果も高める秘訣だと思います。

●高知県立伊野商業高校　企画部長・国際観光科長　大原信男先生

教員は自己分析できているか？生徒や保護者の問題に転嫁する傾向も

進路指導を「難しい」と考える先生が9割以上とのことですが（10p）、これは多すぎると思いました。なぜなら、「難しくない仕事」というものはありませんし、私たちが進路指導を難しいと思ってしまったら、それ以上の発展は難しいと考えるからです。

「進路指導の難しさの要因」（11p）を見て私がもっとも気になったのは、「学校の問題」の低さです。「旧態依然とした教員の価値観」や「生徒とのコミュニケーション不足」は、もう少し高くてもよいでしょう。教員が、もう少し自分たちにも目を向ける必要があるように感じます。いくつかの高校での経験から申し上げるなら、進路指導における最大の課題は、やはり教員の古い価値観や、学校の体制ではないでしょうか。そうした「学校の問題」に比べ、「生徒の問題」や「保護者の問題」などが高い印象があります。それらに視点を置き替えている傾向もあるかもしれません。

キャリア教育は進展しつつあり（22p）、良い傾向だと思いますが、フリーアンサーを見ると、先生方の「負担感」はまだまだ大きい。それはおそらく、インターンシップや体験学習といったイベント的な取り組みを強いられているためだと思います。それらも手法の一つですが、キャリア教育とはもともと、日常のなかで行われるべきもの。今日の授業が将来の何につながるのかを伝えることや、先生方がいきいきと働く姿を見せること自体がキャリア教育のはずです。子どもたちはたくさんの大人たちの中から、生き方の「モデル探し」をしています。いくらイベントを繰り返しても、生徒の内発的な動機づけに繋がらなければ意味がないと思います。それを実現するのがキャリア教育であると、認識を新たにすべきではないでしょうか。

●福岡県立城南高校　教務部長　下田浩一先生

「将来やりたいこと」が見つからない生徒に新たな知見での指導が必要になっている

「進路指導の難しさの要因」（11p）の中にある生徒の「学習意欲の低下」は、私も否めないと思っています。「貪欲さ」は確かに減っているでしょう。以前のように「いい大学」「いい会社」を目指すモチベーションはもちづらくなっているので、何のために勉強するのか、その目標設定の指導に多くの先生方が苦労されているのではないでしょうか。

生徒の「進路選択・決定能力の不足」も同感です。これについては周囲の空気も影響していると思います。

小さいころから家や学校で「あなたのやりたいことは何？」と問われ続け、自分探しや適職探しを続けさせるムードが子どもたちの周囲に蔓延しているように感じます。そのなかで自分探しに迷い、「将来やりたいこと」が見つからない生徒は、進路決定がまるで強迫観念であるかのように苦悩する。このような生徒に対して、教師はこれまで以上の知見や情報をもって指導に臨まなくてはならないという点も、指導をさらに困難にしているのではないでしょうか。そもそも高校生の知る職業は限られてもいますから、将来の職業を決め、そこから逆算して進路先を決めさせる手法だけのキャリア教育では、なかなか難しいと思います。

「キャリア教育」と言われる以前の1994年に、本校は「ドリカムプラン」をスタートさせました。約20年間行ってきて感じるのは、イベント型キャリア教育における「変化」の必要性です。長年取り組むなかで進路を取り巻く環境や生徒の意識も変わるし、教員も入れ替わる。状況に合わせ、変わらざるを得ない部分もあると実感します。今後は日々の授業や指導のなかで、日常型キャリア教育を進めていく仕組みを整えていきたいと私は考えています。